◎農業の四季／２月／豊凶占う「管粥祭」／樹皮で　越冬した虫落とし

　私の住む愛知県豊橋市石巻町にある石巻神社では、石巻山の山上社で例年旧正月に「管粥祭（くだがゆさい）」が行われます。今年は２月１１、１２日に行われました。この行事は農作物の豊凶を占います。
１２日の早朝、神田（しんでん）で収穫された１升ほどの斎米(ときまい)を、葦（あし）の茎（管）と一緒に、大きな鉄釜で煮て粥（かゆ）を作ります。葦の茎（管）は、約１０センチメートルほどの長さに切りそろえられて１８本用意されます。

　１８本の管には「小豆」「粟（あわ）」「早稲（わせ）」などの伝来の刻印が記されます。神主が祝詞を奏上した後、竈(かまど)に火打石で点火し、氏子総代が火の番に当たります。神主は、頃合いを見て釜の中に１８本の管を入れ、三つまたの榊（さかき）で攪拌(かくはん)し秘伝の呪文を唱えながら粥を作ります。
　粥ができ上がると、釜の中から管を取り出して、刻印に合わせて判定板の上に粥を管から突き出します。作物別の１７本と作物全体を占う１本の総管の粥が並べられます。管の中に入っていた粥の多少、形状、光沢などにより神主が「大吉」「吉」「中」「下」の４段階の判定を下します。粥は拝殿に並べられて展示されます。その判定結果は木版で印刷されて町民に配られます。

　この粥は参拝者に柏（かしわ）の葉に載せられ配られますが、今では食べる人も少なくなりました。参加者は、お役の方だけで執り行うことが多く、参拝する人はほとんどいません。地域の儀式を後世に伝えていくことも必要だと思い、今年は暗い夜道を歩き神社まで行き、神聖な思いで儀式に参加しました。

　この地域は次郎柿が主たる農産物ですが、この管粥祭の刻印の中にはありません。管粥祭はずいぶん昔から伝わるため、その当時はまだ次郎柿は栽培されていなかったのだと考えられます。

　次郎柿はこの地で栽培されるようになって１００年以上になり、当園でも義父が２０歳ごろから栽培していますので８０年になります。

　当時はお蚕を飼っており桑畑が主だったようですが、時代の流れで作る物が変わり、お茶、梨、次郎柿栽培となっていったようです。

　さてこの時期の柿の作業は、剪定（せんてい）と、柿の幹や枝の樹皮の凸凹しているところで越冬している虫を落とす作業があります。樹皮を木工刀などで幹からこそげますが、時間がかかるので、高圧洗浄機で水を吹き付け樹皮を落とします。跳ね返りもひどいので、カッパ、長靴、フェイスシールド、マスク、メガネと完全防備で行います。

　風向きによっては自分に樹皮が振りかかり、完全防備していても顔中ゴミがびっしり付き、ひと様にはお見せできません。柿の木もこの作業を行うと黒から白になり畑が綺麗になります。今年は長男の妻と一緒に農作業をしています。

　女性と言えば私が所属している農民運動全国連合会（農民連）女性部では、毎年この時期に総会を行います。５年ほど前から関わるようになり、全国の女性部役員から農業のこと、家庭での出来事などを聞きあうことで明日への活力となります。

　今年の総会では「持続可能な食料生産とアグロエコロジー（生態系を生かした農業）」と題して記念講演と実践報告がありました。生産者として消費者に安心して食べてもらえる農産物を作っていきたいとの思いで、勉強ができたのではないかと思います。

　夜の交流会では、持ち寄りで全国からの名産品、郷土料理が並び、より取り見取りで全部は食べられないほどたくさんありました。私は次郎柿の柿ケーキ、サツマイモのスイートポテトを持参しました。各県からの食材の案内や芸などを披露し楽しい時間を共に過ご~~し~~ました。

（了）